

弘長二年の鎌倉仏教

聖人が伊豆の伊東に法華經の故に流人の生活を送るといふ、仏教史上未曾有の宗教的生活を営んでおつた時に、日本の仏教界はどうであつたらうか。鎌倉の仏教界にどんなことがあつたかを述べるのも、聖人の法華經生活と対比してむだではないと思ふのである。

聖人は伊豆の伊東には弘長元年の四十歳より弘長三年二月にいたる約一か年と八か月の流人生活をなされたのである。

四恩抄は弘長二年の正月の述作であるが、弘長二年という年は、仏教界に大きな出来事が二つあつた。

一つは親鸞上人の入滅である。日蓮聖人の御遺文中には親鸞上人に言及したところは一か所もない。法門の上からいえばその師匠たる法然上人を破折しておるから、親鸞上人に言及する要はなかつたのであらうと思う。四恩抄の中に「世末になりて候へば妻子を帯して侯比丘も人の帰依をうけ」とあるが、これが親鸞上人のことを指したのであるといえはいえないこともないが、御

遺文中には親鸞上人に言及した箇所はない。元亨釈書という、わが国に仏教渡来以後、元亨年間までの七百年間における高僧の事蹟、仏教の史実を記した書物に、親鸞上人のことがのつておらないので、一時は親鸞上人の存在を否定する説まででたことがあったが、これは史上の人物を抹殺することの流行した時代の余波であつて、今はもっと研究がすすんでいるのでそういうことはない。但し聖人の時代には親鸞上人は今の真宗の人が考える程、えらい人ではなかつたらしく、俗人の間にはいつておつたので、聖人の論評もなかつたのであろう。しかし聖人が、伊豆の伊東に流人の生活をなさつておつた弘長二年の十一月二十八日に親鸞上人が入寂していることは、ここに記述しておいても無駄ではないと思う。

さてもう一つの重大なる出来事がある。

念仏無間、禅天魔、真言亡国、律国賊とは聖人の有名なる四つの格言であるが、律国賊と聖人がいわれた律宗の僧侶は、鎌倉の極楽寺の良観を当面の人としておるのである。その良観は弘長元年に鎌倉に律を弘めるためにきたり、文永四年には、聖人を伊豆の伊東へ流罪するために運動した北条重時を埋めた極楽寺に住したのである。

「良観がさんそによつて、日蓮聖人を佐渡に配流し奉り候」とは頼基陳状にあるところであるが、聖人を伊豆へ流罪した重時の菩提所の住職が、八年後には聖人を佐渡へ流罪することに運動したのも不思議な因縁であるといわねばならない。

その良観の師匠たる叡尊は弘長二年二月二十七日に鎌倉にきて八月十五日まで鎌倉に滞在したのである。

叡尊は蒙古襲来の弘安四年に敵国降伏を祈禱して効験があつたとされ、その功を賞せられて、所望はないかといわれた時に「われ本より望なし、ただ天下の酒を止むること三日にして可なり」といったので、お上の命令をもつて、酒屋の酒がめを全部ぶちこわしてしまつた。

酒はりりんとして流れ、人間はのむことができないのだから、鶏や犬が酒をのんで大いに酔つたと本に書いてある。これを聖人の「ただ女房と酒うちのみて南無妙法蓮華経となへ給へ。苦をば苦とさとり楽をば楽とひらき、苦楽ともに思い合わせて南無妙法蓮華経とうちとなへゐさせ給へ。これあに自受法楽にあらざや」（全集一一四三ページ）と四条金吾殿に教示したことを思うと、天地雲泥の相違といわねばならない。

律宗の僧侶は国師をもつて任じておつたから、このような鶏や犬に酒をのませるようなのは国師どころか国賊であると聖人が叱咤したのである。

この叡尊は、聖人が伊豆の伊東にあつた弘長二年に鎌倉にきて律宗を弘め授戒したのである。鎌倉における貴賤男女受戒聴講の人びとが大変な人数にのぼり、評定衆大名奉行の一族、あるいはまた遠国からくる者はその数五千九十四人とある書にのせ、あるいはまた一万人にも及んだとのせる書物もあるのである。

弘長二年の七月十三日、北条時頼は叡尊の滞在しておる寺を訪ずねた。

何故の訪問かとの叡尊の問いに対して、時頼の返答が本当のことをいっているので、ここに引用しておく。

時頼答えて曰く「かたじけなくも不肖の身をもって、征夷の権を執り（これを略して執権職というのである）外出のことは危険極まりもなく競々の思い薄氷をふむが如くである」云々といっている。相手が僧侶なので本当のことを訴えたのであろうが、われわれの考えている執権職と大分違うということ忘れてはならない。

さて、何故戦々競々の思いである自分が尋ねたかといえば、授戒を願うためであるといったのである。叡尊はそんな様子では来るのが大変であろうから、自分の方から出掛けていって授戒してやるといって、七月十八日に、時頼の屋敷におもむいたのである。授戒が終ってから後でしばらく談話をし、退出の時は、時頼は庭においてこれを見送ることしばし、叡尊が門を出た後、始めて座についたという程でいねいを極めたということである。

これをもつてみても叡尊の得意、またわざわざ京都から師匠の叡尊を鎌倉によんだ、極楽寺良観の得意やおもうべしである。後年祈雨のことによって、聖人に負けた良観が、聖人を佐渡に流す程の運動が出来たのも故なしとしないのである。